

銚子の漁業

銚子の漁業は、1658年(万治元)紀州より崎山治郎右衛門が外川に移住してこの地に港を開拓したのが始まりです。

現在の銚子漁港においては、1932年(昭和7)に第一市場が完成致しました。銚子は、沖合漁業の一大根拠地として80有余年の歴史を経て飛躍的な発展を遂げてきました。

銚子沖は、暖流「黒潮」と、寒流「親潮」がぶつかり合い、ここに出来る潮目では魚のエサとなるプランクトンが多く発生します。さらに利根川より豊富な栄養が流れ込むため、多種多様な魚が集まって来ると言われています。

銚子漁港に所属する在籍船数は、大小合せ300数隻程おり、漁業種別にみると旋網漁業をはじめ、沖合底曳、小型底曳、秋刀魚棒受網、大目流網、一本釣り延縄等の漁業が行われております。

銚子漁港の平成28年度水揚げ数量は、およそ273,963トンで銚子港所属船の数量は39,849トンで全体のおよそ15%、金額では約26,674,274千円で銚子港所属船の金額は5,102,690千円で全体の約19%となっています。

以上のことから、銚子漁港は所属船以外の船(廻船)によって支えられている漁港というのがお解りになるかと思えます。

この理由として、銚子沖は日本有数の好漁場が形成され、その魚を求めて太平洋沿岸の多くの漁船が集まって来ることが大きな要因となっています。

漁業種類別にみると、いわし・さば・あじ等の旋網漁業が数量で全体の約90%、金額では全体の約58%を占めており、銚子の漁業が旋網漁業によって支えられていると言っても過言ではありません。

銚子漁港は、第一から第三市場まで整備され、漁業種類により水揚げされる魚種が異なります。

第一卸売市場では、マグロ類(メバチ・ビンチョウ・カジキ)が延縄漁業により水揚げされ年間およそ34億円ほどの水揚げがされます。ここで水揚げされるマグロ類は、全て生マグロであり九州、四国の所属船がほとんどです。

旋網漁業については、第二市場にて年間を通じ銚子港を拠点とし、いわし・さば・あじ等の水揚げがされますが、7月から10月頃にかけて銚子沖から海水温等の影響により魚は北上し、旋網漁船は青森県八戸港を拠点とし操業致します。この漁業は、船体自体も大型で一度に300トンから400トンもの魚を漁獲することが出来ます。

この他にも、第三市場において沖合底曳網、小型底曳網、これは網を海中に入れ開口版(オッターボード)で網を広げながら海底付近にいるタイ・ヒラメ・カレイ類といった底魚を混獲しています。

小型の一本釣り延縄漁業で漁獲される代表的な魚として、ブランド化が図られた「千葉ブランド水産物」の第一号の認定、「地域団体登録商標」の認定を受けた「銚子つりきんめ」を漁獲しています。

お盆を過ぎるとサンマ漁が解禁され、北海道沖の漁場に向け出漁して行きます。サンマは光に集まってくる習性があり、集魚灯を海面に照らし集まってきた魚を大型の網ですくう漁法です。サンマは海水温の低下と共に北海道沖から南下をし、東北沖、そして銚子沖へと漁場が形成されていきます。

銚子漁港における盛漁期は、秋のサンマ漁から始まり、同時に旋網漁業によるサバ漁が本格化され銚子の港は一気に活気づきます。

春先からは、底曳網漁業の主魚種であるヤリイカ漁が本格化し、6月まで操業し夏場の2ヶ月間は資源保護、船の整備期間として休漁期に入ります。

銚子漁港の水揚げとしては、4月から6月まで平均的な水揚げで推移し、7月よりサンマ・サバの最盛期を迎える10月後半までは漁獲も少なく低調な水揚げ状況となります。

銚子漁港は、200種類以上の魚が水揚げされ全国的にもトップの水揚げを誇り、数量では6年連続昨年まで日本一を記録しております。

このように、銚子漁港は漁場にも恵まれ多方面より船が集結する全国有数の漁業根拠地として今後益々の発展が期待されています。

〈参 考〉

表1 平成28年度水揚実績表 (単位：千円)

区 分	数 量(ト)	金 額(税込)	比 率	
			数量 (%)	金額 (%)
地元船	39,849	5,102,690	15	19
廻 船	234,114	21,571,586	85	81
合 計	273,963	26,674,276	100	100

表2 水揚実績対比表 (単位：千円)

年 度	数 量(ト)	金 額(税込)
平成27年度	253,884	24,986,505
平成28年度	273,963	26,674,276
増 減	20,079	1,687,771

【平成28年度 銚子市漁業協同組合業務報告書による】